



認知症と お薬について

和歌山県立医科大学附属病院
認知症疾患医療センター



はじめに・・・

認知症はもともと正常であった記憶力や判断力などの知能（認知機能）が何らかの原因によって徐々に低下し、日常生活や社会生活に支障がでてきた状態をいいます。

認知機能を回復させたり、認知機能低下を止めたりする薬はまだ見つかっておらず、今後の研究の進展が待たれるところです。

では認知症患者さんに薬を出すのはどうしてでしょうか？

まず、認知症患者さんの脳全体の活動が低下する場合は元気がなくなったり、意欲・やる気がなくなったりします。このような場合には、脳を活性化する薬によって少し気力が回復する可能性があります。

また脳の神経細胞の働きのバランスが崩れると、すぐ怒ったりイライラしたりするような症状になる場合もありますが、このようなケースでは脳の活動を穏やかにしたり、神経活動のバランスを調節する薬が使われます。

実際の患者さんでは、意欲の低下とイライラが混在したりしますので、その人に合った薬の種類や量を調節します。



認知症と分かったら…



知っておきたいこと①

薬による治療

～進行を遅らせ、行動・心理的症状の緩和のために～

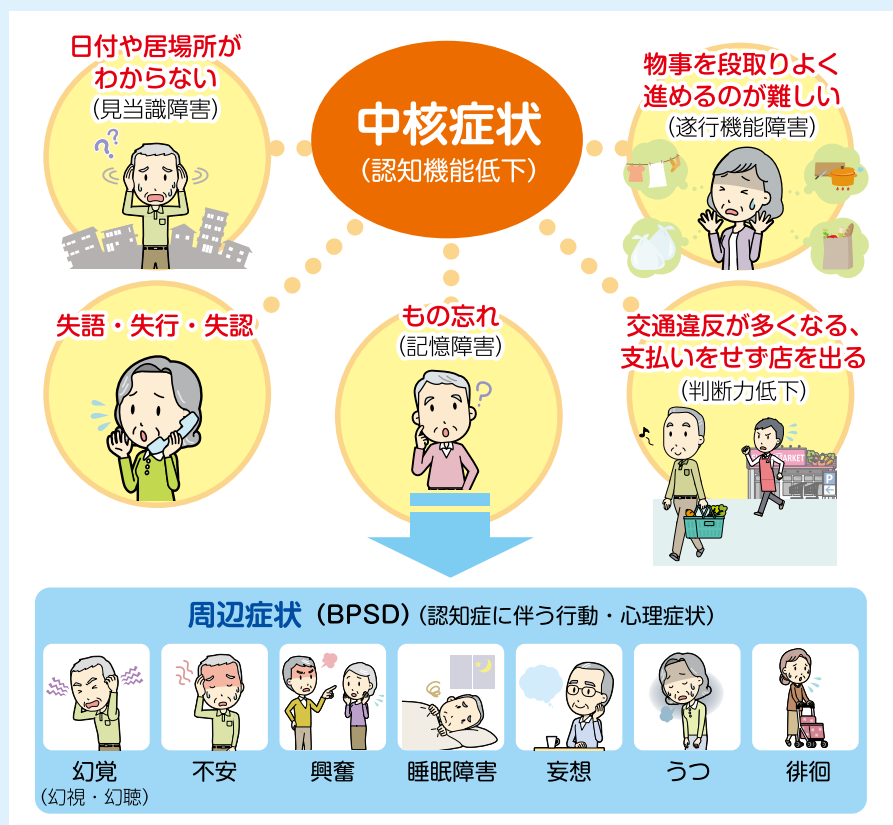
現在、認知症の進行を完全に止める薬はまだありません。しかし薬による治療で、脳を活性化させることで、今ある記憶力や判断力を保ったり、低下を緩やかにしたりします。不安や興奮、暴力などの症状にも薬が処方されることがあります。効果には個人差がありますが、効果が感じられないから、あるいは効果が出たからといって、勝手に服用量を減らしたり、やめたりすることはしないでください。

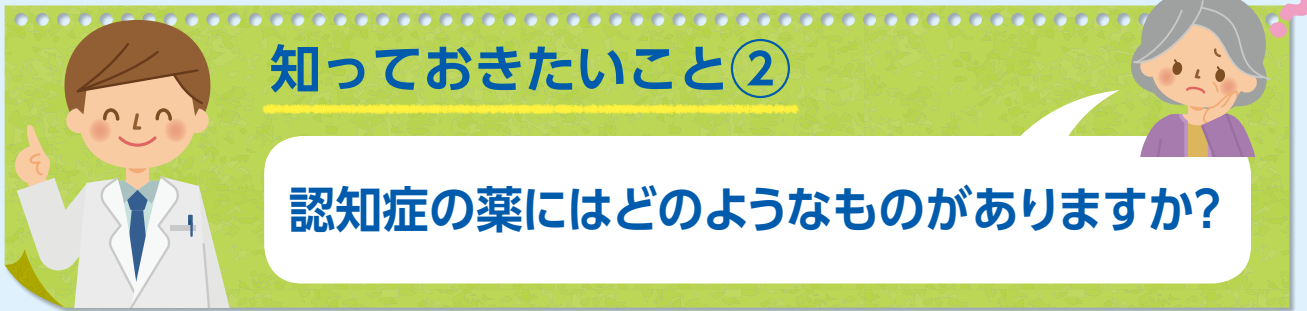
認知症には、大きく分けて2つの症状があり、1つは「記憶障害」(いわゆるもの忘れ)や「見当識障害」(今日の日付や居場所など自分のまわりの状況がわからなくなる)などを示す「**中核症状**」です。

もう1つは、うつ・不安・興奮・睡眠障害など、心理面や行動面でその人特有の症状が現れる「**認知症に伴う行動・心理症状 (BPSD)**」です。

「**中核症状**」の進行を緩やかにする薬と、「**意欲を高める薬**」「**気持ちを静める薬**」など行動・心理症状の状態に合わせて使う薬に分かれています。

残念ながら服薬によって急激に症状を改善させるのは難しいとされています。しかし認知機能低下の進行を遅らせたり、BPSDを緩和したりすることで、その人らしく生きられる時間を延ばすことができるのです。





知っておきたいこと②

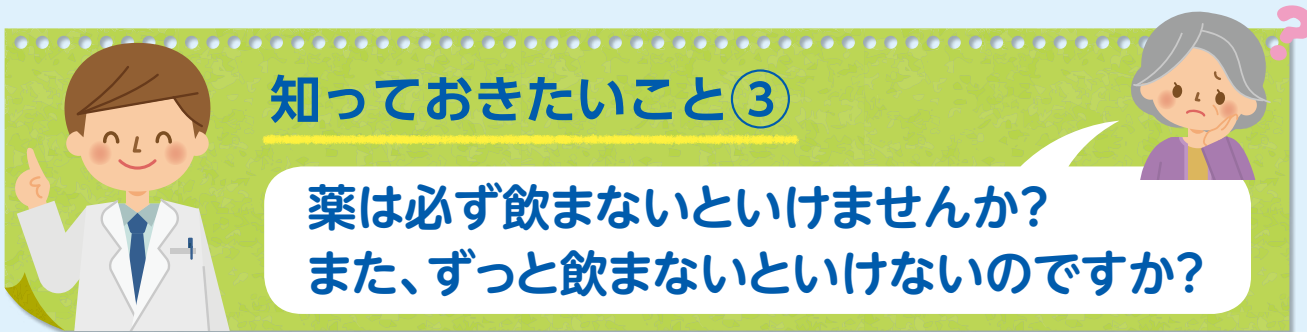
認知症の薬にはどのようなものがありますか？

これまでわが国では、アリセプト®(ドネペジル) が記憶障害の進行を遅らせる唯一の薬として用いられてきましたが、平成 23 年からメモリー®(メマンチン) やレミニール®(ガランタミン) やイクセロンパッチ®・リバスタッチパッチ®(リバスチグミン) が発売されました。(下記表参照)

その人ごとの症状にあわせて、薬を処方してもらう必要があります。担当の医師にご相談ください。

【抗認知症薬】

商品名	アリセプト®	レミニール®	イクセロンパッチ® リバスタッチパッチ®	メモリー®
一般名	ドネペジル	ガランタミン	リバスチグミン	メマンチン
作用機序	アセチルコリンエステラーゼ阻害薬			NMDA受容体拮抗薬
効果	認知症症状の進行を遅らせる			
副作用	消化器症状(悪心・嘔吐・下痢)、不整脈、興奮など			めまい・眠気など
剤状	錠剤・口腔内崩壊剤・細粒・ゼリー	錠剤・口腔内崩壊剤・液剤	貼付剤	錠剤・口腔内崩壊剤
用法	1日1回3mgから開始、1~2週後に5mgへ増量、10mgまで増量可	1日2回8mgから開始、4週間後に16mgへ増量、24mgまで増量可	1日1回貼り替え、4.5mgから開始、4週間毎に18mgまで増量可	1日1回5mgから開始、1週間毎に5mgずつ20mgまで増量可



知っておきたいこと③

薬は必ず飲まないといけませんか？
また、ずっと飲まないといけないのですか？

薬は必ず飲まないといけないものではありませんし、ご本人やご家族の考え方によっては飲まないという選択肢もあり得ます。ただ、ある程度の効果は証明されているので、副作用の問題がなければお飲みになることをお勧めします。



知っておきたいこと④

薬さえ飲んでいれば大丈夫… ではない

認知症は治療よりも療養が大切な病気です。薬はあくまで補助だと考え、**生活環境やコミュニケーションを調整することが第一です**。せっかく薬を飲んでも、例えば家に閉じこもりがちな生活を続けていると、脳への刺激が少ない状態が続いてしまい、薬の効果を十分に得られない場合があります。

ご本人が困っていることを具体的にリストアップして、それぞれの問題点に対してサポートできることをご家族や担当のケアマネジャーと一緒に考えましょう。ご本人の負担を軽くし、不安を少なくするだけで気力やコミュニケーションの改善がみられることもあります。



知っておきたいこと⑤

抗認知症薬と 自動車運転について

認知症と診断された場合、運転免許取り消しとなることが道路交通法で定められています。軽度認知障害（MCI）の診断でも、抗認知症薬が処方されている場合、車の運転は禁止されています。

（道路交通法 第66条（過労運転等の禁止）～略～過労、病気、**薬物の影響**その他の理由により、正常な運転ができないおそれがある状態で車両等を運転してはならない。）

抗認知症薬の副作用として、意識障害・めまい・眠気・傾眠があるとされており、自動車の運転はしてはいけないことになっています。



▶▶ 「認知症に効果がある薬」について、詳しくは **次のページ** をご覧ください。



知っておきたいこと⑥

認知症に効果のある薬： アリセプト®

アルツハイマー型認知症の軽度から高度にかけて、**進行を遅らせることができる**と言われるのがアリセプト®です。認知症症状のひとつである記憶障害を緩和する効果も期待されています。1日1回の服用でよいので、他の疾患で飲まれている薬がある方は、その薬を飲むタイミングで服用することもできます。

「アセチルコリン」という神経伝達物質の減少を防ぐ作用がある、アセチルコリンエステラーゼ阻害剤のひとつです。

副作用として主に見られるのが「吐き気・嘔吐・食欲不振・下痢・興奮」などの症状です。脳内のドーパミン量を増加する作用があるため、突然暴れだしたり妄想や幻覚を視たりする「せん妄」などが引き起こされる可能性もあります。

逆に意欲低下しているアルツハイマー型認知症の方は服用することで、脳内のドーパミン量が増加し、活気が戻る場合があります。

現在、レビー小体型認知症の薬として認められているのはアリセプト®のみです。

また、不整脈など心臓疾患の持病がある方は服用できません。



知っておきたいこと⑦

認知症に効果のある薬： レミニール®

レミニール®は、アリセプト®と同様、アセチルコリンが行う神経伝達を助ける薬（アセチルコリンエステラーゼ阻害剤）です。

軽度および中等度のアルツハイマー型認知症に適応されます。

服用し続けることにより、**記憶障害や見当識障害の症状を抑え、アルツハイマー型認知症の進行を遅らせることができます。**

ただし、吐き気や嘔吐などさまざまな副作用も報告されているので、服用によって体調不良が生じた場合は、服用法や量について医師や薬剤師に相談しましょう。



知っておきたいこと⑧

認知症に効果のある薬： イクセロンパッチ[®]・リバスタッチパッチ[®]

イクセロンパッチ[®]とリバスタッチパッチ[®]も、アセチルコリンエステラーゼ阻害剤のひとつです。

「パッチ」という名がついている通り、イクセロンパッチ[®]とリバスタッチパッチ[®]は貼り薬です。そのため、飲み込みがうまくできない患者さんも使用できます。

軽度および中等度のアルツハイマー型認知症に適応されます。

過去に、湿布薬を使用してかゆみや発疹が出たなどの経験がある場合は、医師に事前に相談しましょう。



知っておきたいこと⑨

認知症に効果のある薬： メマリー[®]

脳には神経細胞を興奮させる「グルタミン酸」という神経伝達物質があります。

このグルタミン酸によって、脳内で神経に情報を伝える **NMDA 受容体**が過剰に活性化され、神経細胞や記憶に障害が現れるということも少なくありません。認知症患者ではこのグルタミン酸が過剰になっていることが判っています。

メマリー[®]は、神経細胞の興奮を防ぐためにグルタミン酸の働きを抑える効果を持つ薬です。物忘れや妄想や興奮など、介護者の負担が大きい興奮型の症状が出ている人に処方されます。

認知症の薬には、「意欲を高めるタイプ」と「精神を落ち着かせるタイプ」の2種類がありますが、メマリー[®]は後者の部類に入ります。

中等度以上のアルツハイマー型認知症の方に処方されることが多いです。

服用しすぎると精神が沈静化しすぎてしまい、活動量や意欲が極度に低下する恐れがあります。

場合によっては「日中も寝てばかり」といった事態も起きかねないので、過剰摂取しないよう注意しなければなりません。



知っておきたいこと⑩

その症状、実は副作用かも…

認知症の薬は、症状の進行を遅らせる効果が期待できる一方で、**副作用によって服用した人の心の状態や活動性に大きな影響を与える恐れがあります。**

怒りっぽくなったり、自己主張が強くなったりといった症状がみられた場合、家族など周囲の人間は認知症のせいだそうになったと考えがちです。

しかし実際には、色々な症状の薬を同時併用することで、副作用として認知症に似た症状が出ていることも少なくありません。それまで十数種類の薬を飲んでいて認知症の人が、医師の指導のもとで服用内容を見直して薬の量を減らしたところ、認知症の症状が大幅に改善したケースも数多く報告されているのです。

医師から抗認知症薬を処方してもらっているのに行動・心理症状が続くという場合は、薬の副作用によって症状が起こっていることも否定できません。

その場合はひとりで悩まずに、かかりつけ医に症状について相談するようにしましょう。



知っておきたいこと⑪

服薬管理のポイント

認知症が進行すると、記憶力をはじめ理解力や判断力の低下も著しくなるため、服薬管理の問題がどうしても生じてきます。

ただ、ちょっと薬をうまく飲めないからといって、介護者が全面的に服薬管理を代行してしまうのは、必ずしも良いとは言えません。

本人がまだ「自分で管理できる」と考えているのに、介護者が無理に手伝おうとすると、自尊心を傷つけてしまいます。

残存能力をできるだけ尊重し、できない部分だけ支えていくことが、認知症の介護においては大事なことです。

訪問看護や居宅療養管理指導など服薬管理を行う介護保険サービスもあるので、担当のケアマネジャーに相談してみましょう。

服薬管理 ポイント



飲み忘れを防ぐ…

「お薬カレンダー」や1週間・1ヵ月ごとなどで飲む薬をまとめられる「お薬ケース」を活用するのがおすすめです。また、一度に飲む薬が多くていつも何かを飲み忘れてしまう…という場合には、薬局などでお願いすると1回分のお薬をひとつの袋にまとめてもらえます（薬の一包化）。

包みごとにいつ飲むのかを印字もしくは手書きしておけば、間違いも防げます。

不在時には、電話やメモ、アラームなどを使って、飲む時間を知らせるといいでしょう。



お薬カレンダー



お薬ケース



薬の一包化

服薬管理 ポイント



飲みすぎを防ぐ…

認知症の人は記憶障害が起こっているため、既に薬を飲んだことを忘れてしまい、「まだ飲んでいない」と訴えることも少なくありません。

この場合、本人は「飲んでいない」ことを事実として受け止めているため、「もう飲んだよ」と言って説得することは効果がありません。

だからといって、追加で薬を飲ませることは副作用のリスクが生じるので厳禁。

この場合、対策として考えられるのが「偽薬」の利用です。

偽薬を飲んでもらうことで、本人は「きちんと薬を飲んだ」という安心感を得ることができます。

市販されている偽薬は、原料には還元麦芽糖などが用いられているので、飲んで体には何の影響もありません。

服薬管理 ポイント



服薬を拒否する…

本人が薬を飲むことを嫌がる場合や、うまく飲めない場合は、医師にお願いして飲みやすい形状に変えるのもひとつの方法です。

例えばそれまで錠剤だったものを、ゼリー状や液状のものに変更すると、拒絶する気持ちが和らぐかもしれません。

ただ、こうした対処方法だけでなく、本人の気持ちに寄り添うことも大切です。

飲んでもらおうとした時は嫌がっても、後で気持ちが落ち着いた時に飲んでもらえることもあります。



服薬管理 ポイント



医師や薬剤師と連携が大切

薬物療法においては、医師と薬剤師と信頼関係を築いていくことが大事です。

副作用が起こっていないか注意し、何か心身に異常がみられたら、いつでも気軽に相談できるような体制を作っておきましょう。

副作用は、薬を飲み始めたときと種類や量を変更したときに起こりやすいです。

介護をしている家族は、薬を飲んでいる本人の変化を日々観察して記録を作り、医療機関と共有すると良いでしょう。

病院や薬局に行く場合は、服用中の薬が記載された「お薬手帳」を持参し、医師や薬剤師に伝えられるようにしておきましょう。また「お薬手帳」は同じ薬を継続して飲んでいても、記載するようにしましょう。

利用する病院や薬局をひとつに絞り、長期にわたって本人の心身状態を知ってもらうようにすることもおすすめです。

医療情報・薬の情報をできるだけ一つにまとめましょう。



認知症疾患医療センターでは、 専門医療相談を行っています

認知症疾患医療センターでは、認知症に関する専門知識を有する精神保健福祉士、保健師を相談員として配置し、ご本人やご家族、関係機関からの認知症に関する医療相談を受けています。

- ◆ もの忘れや受診に関するご相談
- ◆ BPSD がある方への対処法
- ◆ 認知症の方との関わり方や生活の工夫について
- ◆ お住まいの地域で認知症の診察を行っている医療機関の情報提供
- ◆ 認知症のお薬について など



認知症疾患医療センター 専用電話

073-441-0776

受付時間：8時45分～17時30分

(土曜・日曜・祝日・年末年始を除く)

※相談費用は無料です。

基本的には電話相談ですが、院内の相談窓口にて相談を受けていただくことも可能です（その場合は事前に専用電話にお電話ください）。

認知症について、どんな些細なことでも構いません。ご本人だけでなく、ご家族の方や関係者の方もお気軽にご相談ください。